自分の殻を破る

-ソウルが私を変えた-

Break Out of My Shell:

Seoul Changed My Life

ソウル市立大学[1]国語国文学科　**小松　愛**

KOMATSU Ai

(Department of Korean Language and Literature, University of Seoul)

キーワード：韓国、海外留学

はじめに

近くて遠い国と言われていた韓国が、現在のように日本人にとって行きやすい旅行先になったのは韓流の影響が大きいだろう。私も韓国ドラマにはまり韓国語の勉強を始めた。それまで全く韓国に関心もなかった私が、韓国に来てすでに3年半が経った。

田舎で生まれ育ち、田舎で就職したごく普通の社会人が韓国に留学することを決めたきっかけは、大きく2つある。まず一つ目は、韓国語の先生との出会いだ。ドラマにはまった私は、最初は独学で韓国語の勉強を始めた。しかしすぐに行き詰ってしまった。普段ならそこで諦めてしまうのだが、毎日家と会社の往復に飽き飽きしていたこともあって、趣味の一環として文化センターの韓国語教室に通い始めた。そこで出会った先生が私の運命を変えたと言っても過言ではない。先生は旦那さんの都合で5年間韓国に住んでいた日本人だった。韓国語の実力はもちろんのこと、先生の考え方、持っている人間力が私を引き付けたのだと思う。当時25歳だった私は、早く結婚して専業主婦になることが人生の目標だった。先生はそんな私が考えたこともない人生観、世界観を持った人だった。いつか先生のように生きたいというのが私の人生の目標になった。

もう一つのきっかけは韓国旅行だった。先生と韓国語教室のメンバー2人と4人で韓国旅行をしたのだが、1年勉強したにも関わらず、全く口から韓国語が出てこなかった。周囲で聞こえてくる韓国語も何を言っているか全く聞き取れなかった。元々人見知りで引っ込み思案な私は、周りのメンバーの後ろに隠れて自分から話すことはほぼなかった。もちろん旅行自体は楽しかったのだが後悔が残った。

[1] http://www.uos.ac.kr/en/main.do

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

それから、韓国語をもっと勉強したいという気持ちが強まったのだと思う。そんな時に、先生が韓国の語学堂の話をしてくれた。その話を聞いてから韓国語を勉強しに韓国に行きたいという気持ちが強くなった。2012年の夏、初めて両親に韓国留学について話したのだが、全く相手にしてもらえなかった。だが、困ったことがあればすぐに両親に頼っていた私が、語学堂の手続きやビザの申請を自力でしたのを見て両親も納得してくれ、2013年2月25日、私の韓国生活が始まった。

ソウル大学言語教育院

私が韓国語を勉強することを決めた大学はソウル大学の語学堂だった。ソウル大学に決めた理由は、先生の通っていた語学堂であること、また当初は1年語学堂に通ったら、日本に帰って就職するつもりだったので、一般的に知名度も高く、韓国一頭のいい大学だと知られているので、ハッタリがきくかもという軽い気持ちだった。理由はどうであれ、私の選択は間違っていなかったと思う。3級から6級修了まで1年間過ごしたが、語学堂時代をすごく有意義に過ごしたと思っている。

授業は、1日朝9時から13時まで4時間、1学期10週間のカリキュラムだった。3級の授業はほぼ韓国語で進められた。最初の頃は、知らない単語が大量に出てくるし、毎日毎日新しいことを勉強するので、頭がパンクするかと思った。だが、中間試験が終わるころにはペースもつかめ、クラスメイトと授業後に遊びに行く余裕も出てきた。6級修了までの1年間、バランスよく勉強できたと思う。

また、ソウル大の語学堂は国籍が豊かだった。交換留学生も同じ授業を受けるからだろうが、今まで日本で会ったことのない国の子たちと仲良くなった。日本にいたときから考えると、日本人の友達も多い方ではなかったのに、いつの間にか外国人の友達がどんどん増え、一緒にご飯やカフェに行くのはもちろんのこと、一泊二日の地方旅行もしたりするほど仲良くなった。卒業して2年半経つのだが、いまだに連絡を取り合う友達もいて、私の中でかけがえのない時間だったと思う。

写真1:語学堂時代に授業の一環で訪問した韓国と北朝鮮の国境、板門店

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

ワーキングホリデーと大学進学の決意

語学堂6級が終わりに近付くにつれて、日本に帰国するか、ワーキングホリデー（以下、ワーホリ）ビザを取って韓国で仕事をするか悩んだ。日本に帰ったら韓国語を忘れそうだし、もっと韓国語が上手くなりたい、実際に使って仕事をしてみたいという気持ちが強くなり、ワーホリビザを取ることを決めた。日本人の友達が働いている会社で、翻訳の求人があるとも言われていたし、語学堂で同じクラスだった友達から、新しくできるホテルのフロントの仕事を紹介するとも言われていたので、なんの不安もなく語学堂を卒業した後、日本でワーホリビザを取得しソウルに戻ってきた。

しかし、ここで韓国ならではの洗礼を受けることになった。履歴書まで渡していた翻訳の仕事は、会社の業績が思わしくないらしく、翻訳の増員は見送りになり、ホテルのフロントは、ホテルのオーナーと社長が揉め、工事が進まずにオープン時期がいつになるかわからない状態だと伝えられた。期待していたバイト先は二つともダメになり、一気にお先真っ暗になってしまった。そこから仕事を探し始め、何度も挫折しそうになったが、1か月経った頃に運よく留学エージェントに雇ってもらえた。仕事の内容は、日本から韓国に来る留学生の対応と学校の紹介、家の手配などだった。やりがいもあり、仕事は楽しかったのだが、一つだけ私を悩ませていたのが給料だった。当時の韓国の最低賃金は5210ウォン、私の時給は5500ウォンだった。フルタイムで働いても80万ウォン（日本円で約8万円）程度にしかならず、日本とそこまで物価の変わらないソウルでの生活はギリギリというよりも赤字だった。仕事を続けたいという気持ちと、実際の生活の中での葛藤で毎日悩んでいた気がする。

そんな当時の私の一番好きだった仕事は学校訪問だった。大学付属の語学堂を訪問し、担当の先生から学校の特徴を聞いたり、実際に大学のキャンパスを歩き、写真を撮ったりして日本に紹介する仕事だ。その仕事をしながら、大学の正規留学の話を聞くことが多くなった。私は日本で大学を卒業していたのだが、大学時代の4年間を無駄に過ごしてしまったとずっと後悔していた。大学時代はバイトに明け暮れ、卒業できればいい程度にしか考えていなかったので、大学時代の思い出＝バイト先での思い出だった。社会人になってから、大学時代にもっと勉強しておけばよかった、大学生活をもう一度やり直したいと後悔していた。

私が運命的な出会いをしたのは、2014年の8月だった。大学紹介の記事を書くために訪れたとある大学のキャンパスに一目ぼれしてしまったのだ。それがソウル市立大学だった。それまでにもソウル市内でキャンパスがきれいだと有名な大学はいくつか訪問していたが、そんな風に思うことは一度もなかった。緑が目の前に飛び込んできて、この大学に通いたい！と一瞬で思わせるほどだった。さらにソウル市立大学の学費は、ソウル市長の選挙公約で数年前から半額授業料政策が行われており、ソウル大の学費の半分、ほかの私立大学の3分の1という額で、無理すれば私にも出せる額だった。一目ぼれして以来、大学に通いたい、もう一度勉強をし直したいという気持ちが一層強くなり、両親に相談してみた。韓国に語学留学するときとは180度違い、とりあえず受けてみたら？という言葉で背中を押

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

してくれた。それからすぐに大学志願のための準備に取り掛かった。私は韓国語をもっと勉強し、深い知識を得たいという理由から、国語国文学科に志願した。書類の準備が複雑で、かなり時間はかかったが無事にすべて提出し、合格通知をもらうことができた。まずは一学期という気持ちで2015年3月にソウル市立大学国語国文学科に入学した。

写真2:私が一目ぼれしたソウル市立大学の風景

ソウル市立大学での生活

ソウル市立大学での生活は想像以上に大変なものだった。まず、私を最も悩ませたのは同級生との年の差だった。29歳で入学した私の同級生は18歳～19歳が最も多かった。韓国では、お互いの呼び方等が変わってくるため、知り合ってからすぐに相手に年齢を聞くのが一般的だ。同級生に聞かれた私は素直に29歳だと答えてしまった…一気に場の空気が変わったのを感じた。まだ高校を卒業したばかりの学生たちから見れば、かなりのおばちゃんが突然同級生として現れれば、動揺するのは当然だろう。友達からは、サバ読まないとダメだと叱られた。最初にできた壁はなかなか崩れず、最初の1学期は外国人の先輩や友達の助けを借りながら、なんとか乗り切った気がする。2学期になり、作文の授業の一環で同じ科の先輩がチューターとして、レポートや発表の仕方を教えてくれるようになった。大学院生の先輩だったので年齢も近いこともあり、作文だけでなく、大学生活全般の面倒を見てくれた。先輩のお陰で、科の先輩や同級生と話したり、悩みを相談したりできるようになり、現在でもなんとか乗り切れている。

また、外国語で授業を聞くというのがここまで大変なことだったのか、ということも実感した。大学に入学するまでの私が触れてきた韓国語は、外国人相手の韓国語だった。しかし、大学の授業のほとんどは韓国人前提である。教授のスピード、話し方、専門用語、どれだけ集中しても聞き逃すこと

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

も多かったし、方言を使う教授の授業はある意味勘が必要になる。授業が終わるころには、頭が回らずにぼーっとしていることも多くあった。さらに、今でも私を苦しめているのが、教材や資料を読むことだ。それまでにも、ニュースやドラマで韓国語を聞くことには慣れていたが、読むことに関してはそこまで練習してこなかった。韓国人学生が10分程度で読み終わる内容でも、わからない単語が出てきたり、最初の方の内容を忘れて読み返したりと、最初の頃は1時間以上かかっていた。専攻の授業が増えるほど、読む本の数は増えているが、今でもまだ克服できていない課題だ。

ソウル市立大学はソウル市内の他の大学に比べると少し狭い方だ。校内を1周しても30分程度しかかからない。ソウルの大学には珍しく坂がほとんどないため、授業で校舎を移動する際もそこまで時間がかからない。また、自然が多いこともあり、休日には家族連れや地域の人の憩いの場にもなっている。私も涼しい時間帯に散歩をしたりしている。

最近まで私は学生寮に住んでいたのだが、10年間一人暮らしをしてきた私が誰かと同じ部屋を使うというのはかなり苦痛だった。学生寮はソウル市内の家賃と比較するとものすごく安く、設備も整った方だったのだが、洗濯やシャワー室など、いっぱいで使えないことも多々あり、自分のペースで生活できないことはストレスだった。ただ、ルームメイトとはかなり仲良くなれた。お互い学生寮を出た今でも、元ルームメイトと一緒にご飯を食べたり、散歩をしたりしている。

韓国と日本の学生の比較

日本と韓国どちらの大学にも通っているので、少し違いが見えてきた（10年ほど違うが…）。まず、韓国の学生たちは本当によく勉強する。図書室の自習エリアは試験期間でなくても勉強している人がたくさんいる。これは就職難や奨学金と関係があるのだろうが、基本的にB＋以上の成績が必要だと考えている学生が多くいる。また、日本よりも課題や発表が多いため、仕方なしに勉強している場合も多いと思う。さらに、就職準備のため、英語や資格の勉強を平行している学生も多くいる。私が日本の大学に通っていたころは、ゼミ以外で前に出て発表する機会はほぼなかったが、韓国では発表の機会も多く与えられるので、学生たちも発表に慣れている印象だった。日本の大学では全く勉強せずにいた私だったが、この雰囲気の中にいるので、今では比較にならないほど勉強している。

ただ、一つだけ私が不思議に思ったのは、韓国の学生は答えを必要としている傾向にあることだった。ある授業で教授が「この問題は答えがないので、どちらが正しいと思うか討論してください」と言い、討論した結果を発表し合う場が設けられた。それぞれの意見を述べたあと、教授が簡単にどちらの意見に対しても同じようにコメントをし、終わろうとしたとき、ある学生が「教授はこれについてどう考えますか？」という質問をしたのだ。これは、この授業に限った事ではなく、ほかの授業でも同じようなことが起こった。 この質問を聞いた時は衝撃的だった。答えがないと言っているのに、教授の立場はどちらか知る必要があるのか私にはわからなかったが、常に試験を見据えて勉強してい

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

るため、正しい答えが必要なのかなと思った。

大学外での生活

大学外では、語学堂時代の友達と遊んだり、韓国人の友達と遊んだりして過ごしている。留学に来たばかりの頃は、ガイドブックに載っているような有名なお店や話題のお店をめぐることが多かったのだが、最近は地元の食堂で安くて美味しいものを探し歩くことが多くなった。また、ソウルにも詳しくなったため、普段ならバスや地下鉄で移動するところを、歩いてゆっくりと見て回り、新しいものを発見するのも楽しみの一つだ。映画や野球が日本よりも安く観られるため、時間ができれば映画館や球場に足を運ぶこともある。

私が好きな場所の一つが市場だ。大学のある清涼里にも市場があるのだが、かなり広くて活気もあり、しかも野菜や果物が安く買える。いつも大量に買いすぎて家に帰るときに苦労するのだが、地元の生活を味わうこともでき、さらに節約にもなるのでよく利用している。

写真3:野球観戦の様子

最後に

韓国に来てから、私は変わったと言われる。私自身もそう思っている。日本にいた頃は一人では何もできず、自分から行動することはほぼなかった。しかし韓国に来てからは、もちろん助けを借りる時もあるが、自分で行動し、考えることができるようになった。また性格も心配性で挑戦を恐れてい

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.

たのだが、今ではとりあえずやってみる！というのが私のモットーになっている。両親にも友達にも、日本にいた時よりも生き生きとしているという言葉をよく聞く。私がここまで変われたことに一番驚いているのは私自身だろう。

最初は先生にあこがれて、韓国語を勉強しにやってきた韓国で、自分の知らなかった世界に触れ、色々な国の人と交流したことで、私自身がかなり成長したのだと思う。この年になってから挑戦するのは、かなり覚悟のいることで、悩むこともたびたびあるが、韓国に来たこと、現在大学に通っていることを後悔はしていない。韓国という場所が私を生まれ変わらせ、新しい人生を歩む第一歩を踏み出させてくれたのだと思う。これからも大学生活を通して多くのことを学び、韓国で大学を無事卒業できるように努力したい。

独立行政法人日本学生支援機構 Copyright © JASSO. All rights reserved.